

# テキストとしての王逸『楚辭章句』 —その問題点—

The Textual Problems of Wang Yi's *Chuci Zhangju*

田 宮 昌 子

後漢王逸『楚辭章句』は、戦国末から後漢に至るまでの楚辭及び屈原理解の集大成であり、先行する注釈書が亡んだため、後世に伝わったものとしては最古の楚辭注釈書である。また、楚辭学の基礎が形成された漢代の楚辭注釈本としても唯一の伝本である。これらのことから、楚辭学において後世の如何なる研究も取って代ることの出来ない特別な位置を占め続けて来た。また屈原の<sup>イメージ</sup>形象形成においても、司馬遷『史記』「屈原傳」と共に屈原に関する最古の情報源として、屈原像の祖型を後世に提示する作用を果たし続けて来た。小稿は後者の位置付けから王逸『楚辭章句』を取り上げる。

『楚辭章句』は、後漢元初年間に成立したと考えられ、その後宋代に刊版が盛んになるまで約八百年間の手写を経ているが、この時期の写本で今に残るものは無い。刊本としては最も早期になる宋版の実物は今に伝わらず、現存する善本は明代に宋版を翻刻したものである。このような状況からテキストとしては多くの問題が指摘されている。小稿では、先行研究において指摘されている問題点と議論を整理し、その上で主題の考察に当たって本研究が取る立場を述べる。

キーワード：イメージの媒体、テキストとしての注釈、思想資料としての語彙

## 目 次

はじめに

一、各篇の序について

二、各篇の注について

三、卷十七「九思」について

四、その他

むすびに

## はじめに

小稿は筆者が「悲憤慷慨の系譜」と名づける研究の一環にあるものである。本研究の関心は、漢字を媒体として記録、蓄積されてきた漢文化について、その通時性、つまり変遷の中の継承の要素に着目し、“Chineseness”（中国を“中国”たらしめるもの）の解明を試みることにある。主題である「悲憤慷慨」の情は、有史以来様々な形式の「文」の中に書き留められており、長い歴史的経緯の中でそれを以って記される事例を蓄積しつつ系譜化してきた。

本研究は、この「悲憤慷慨」の系譜を屈原を切り口として見てみようとする。この系譜上には、他にも「悲憤慷慨」の意境を象徴するいくつもの形象が現れたが、屈原の伝承は前漢には既に成立しており、以来現代まで基本的に絶えることなく行われてきた。屈原は中国文化史の一側面における“変遷の中の継承”を見るに当たって有効且つユニークな切り口たりえると思われる。

屈原という人物と彼の作とされる辞賦については、二千年以上にわたる鑑賞、批評、および研究の歴史があるが、その実在や作品の作者については多くの議論もある。本研究ではこれらの議論には立ち入らない。本研究は屈原の実像如何や作品自体ではなく、屈原のイメージ、つまり後代の人間によってその名に託された価値を考察対象とする。具体的手法としては、屈原という人物及び屈原作“とされた”楚辞（以下、屈賦<sup>1</sup>）について語る漢代以来の語彙を屈原イメージの媒体として扱う。

近年急速に進んだ古典文献の電子文書化によって、このような文化史的な関心を扱うことが可能となって来た。問題点も多々あるが<sup>2</sup>、今までのミクロな視点では見えなかったものが見えてくることが期待でき、また問題点の洗い出しと解決のためにも敢えて実践を試みるものである。

後漢王逸『楚辭章句』は、戦国末から前漢を経て後漢に至るまでの楚辞及び屈原理解の集大成であり、先行する注釈書が亡んだため、後世に伝わったものとしては最古の楚辞注釈書である。また、楚辞学の基礎が形成された漢代の楚辞注釈本としても唯一の伝本である。これらのことから、楚辞学において後世の如何なる研究も取って代ることの出来ない特別な位置を占め続けて来た。また屈原の<sup>イメージ</sup>形象形成においても、司馬遷『史記』「屈原傳」と共に屈原に関する最古の情報源として、屈原像の祖型を後世に提示する作用を果たし続けて来た。小稿は後者の位置付けから王逸『楚辭章句』を取り上げる。

王逸『楚辭章句』は、後漢元初年間（114～119年）に成立したと考えられ<sup>3</sup>、その後宋代に刊版が盛んになるまで約八百年間の手写を経ているが、この時期の写本はわずかに断片的に伝わるのみである<sup>4</sup>。刊本としては最も早期になる宋版『楚辭章句』の実物は今に伝わらず、現存する善本は明代に宋版を翻刻したものである。このような状況からテキストとしては多くの問題が指摘されている。小稿では、以下、先行研究において指摘されている問題点と議論を整理し、その上で主題の考察に当たって本研究が取る立場を述べる。

## 一、各篇の序について

現行本『楚辭章句』に収録される17篇の辞賦の前には、当該篇の作者や制作状況を述べる序が付されている。また、卷一「離騷」篇、卷三「天問」篇には卷末にも序があり、計19篇の序がある。「九思」序を除けば、これらの序は楚辞学に於いて長く王逸の手になるものとして受容され、現在に至っている。例えば、国家プロジェクトとして準備され、2003年に出版された、中国大陸における楚辞学の目下の集大成と言える崔富章総主編『楚辭學文庫』もその立場を取っている<sup>5</sup>。

王逸作の論拠とされるのは、まず『隋書』「經籍志」の「後漢校書郎王逸、集屈原已下、迄於劉向、逸又自爲一篇、并叙而注之、今行於世」という記述である<sup>6</sup>。蔣天枢「《後漢書・王逸傳》考釋」は、宋代以降<sup>7</sup>、王逸序として扱うことが一般的になるのはこの記述に拠ったものとみている。例えば、宋の洪興祖『楚辭補注』がそうであるし、明の張溥および清の嚴可均が王逸の集を編んだ時にも『章句』の篇序を収録している<sup>8</sup>。他に、「離騷」の「後序」に「今臣…作十六卷章句」とあることもよく知られている。

しかし、異論も少なくない。まず『隋書』「經籍志」については、蔣天枢「論《楚辭章句》<sup>9</sup>」が、「王逸…叙而註之」の「叙」が、「今臣…作十六卷章句」の下りから王逸作であることが明らかかな「離騷」後序を指すのかも知れず、各篇の前序をも指すとは限らない。つまり、この記述を以って各篇の前序を王逸作とするのは根拠不足と指摘する。また、「離騷」後序の記述を論拠とすることについても、小南一郎『楚辞とその注釈者たち』が「今臣…作十六卷章句」が序を含むとは断定できないことから、各篇の前序については、誰の手になるかを明示する史料は無いとする。以下に、王逸作序の否定説をより詳しくみて行く。

前述した蔣天枢「論《楚辭章句》」は、一部の篇の序と序、序と注の見解が食い違うこと等を指摘して<sup>10</sup>、注が王逸によるものなら、序は別人のものであるはずと言う。

また、林維純「《楚辭章句》序文作者問題考辨」は、①王逸の序とする確証があるものとして、「離騷」後序、「天問」後序、「九嘆」序の計3篇を挙げ、「九思」序は一部は自序の痕跡があるが、後人の筆が混入している<sup>11</sup>、②その他の序は王逸作と限らない、と見る。

「王逸の序とする確証」として挙げられるのは、以下の表現である（下線部は根拠となる部分）。

「離騷」後序「今臣復以所識所知稽之舊章、合之經傳、作十六卷章句」。以上から、注者自身の自序であると考えられる。

「天問」後序「至於劉向揚雄援引傳記以解説之亦不能詳悉…今則稽之舊章合之經傳以相發明為之符驗章决句斷事事可曉俾後學者永無疑焉」。以上から、注者自身の自序と思われる。

「九嘆」序：「九歎者護左都水使者光祿大夫劉向之所作也、向以博古敏達典校經書辯章舊文追念屈原忠信之節、故作九歎」。自画自賛は不自然であるため、劉向作ではなく、王逸作と見る。

「その他の序は王逸作と限らない」根拠として、特に卷一～十五の前序は王注と食い違うから、

序と注は別人作であると言う。例として挙げられるのは、「九歌」「九章」序が指す制作時期や「大招」序が言う作者と注との違いである。

注目したいのは、「招魂」序である。六臣注『文選』では

逸曰序曰招魂者宋玉之所作也、宋玉憐哀屈原、厥命將落、作招魂欲以復其精神、延其年壽也。  
 翰曰玉哀屈原、憂愁山澤、魂魄飛散、其命將落、故作招魂、欲以復其精神、延其年壽、外陳四方之惡、内崇楚國之美、以諷于君、冀其覺悟而還之

とあることから、林氏はこの序は後世の誰かが王逸によって伝えられた先人の序と宋代の六臣注（翰は李周翰）を引用しているものと指摘する。それが、『章句』現行本では

招魂者宋玉之所作也、招者召也、以手曰招、以言曰召、魂者身之精也、宋玉憐哀屈原忠而斥棄、愁懣山澤、魂魄放佚、厥命將落、故作招魂、欲以復其精神、延其年壽、外陳四方之惡、内崇楚國之美、以諷諫懷王、冀其覺悟而還之也

となる。序から「逸曰序曰」「翰曰」が消え、一人による執筆のように合体されている。ここから、林氏は唐までは各篇の前序を王逸以前に存在した序と認識していたことが分かるとする。

また、「離騷」「天問」の前後に序があることから、序が同一人物によるものなら前後二篇に分ける筈はなく、後序が王逸序であるなら、前序が王逸以外の人物によるのは明らかだとする。

では、巻一～十五の前序は誰が書いたのだろうか。

林氏は劉向説を主張する。根拠として、時代の要求（巻一～十五前序の基調である思君念国、忠賢と讒佞、屈原への愛惜、懷王への諷諫、王室と同姓の重臣の忠誠…が元帝・成帝期の状況と合致する）、思想内容（巻一～十五前序の基調は劉向の上奏文に見える思想と一致）などを挙げたあと、宋以降の『章句』版本の署名が「劉向集、王逸注」であることを指摘し、劉向が収集のみで何の文字も残していないなら、その名を記す必要はないはず、「天問」後序に「至於劉向揚雄援引傳記以解説之…今則稽之舊章合之經傳…」とあり、「離騷」後序に「逮至劉向典校經書分以為十六卷…今臣復…作十六卷章句」とあることから、王逸『章句』の定本は劉向により所集され、序文を付されたものと考えるのである。

また、「九章」の語について、初出は劉向の「九嘆」であり、劉向以前に行われていない。また、同時代の王褒、やや後の揚雄も「九章」の語を使っていない。特に揚雄は「惜誦」から「懷沙」に言及するのに「九章」の語を言わない<sup>12</sup>。以上から、劉向撰『楚辭』で「九章」として初めてまとめられたのであり、すぐには世に広まらなかったものと見る。結論として、林氏は巻一～十五の前序は、劉向序あるいは『章句』原序と呼ぶのが妥当と主張する<sup>13</sup>。

このような王逸作否定説に対しては、以下のような見解が出されている。

まず、序と注の見解が食い違うことに関しては、宮野直也「王逸『楚辭章句』の注釋態度について<sup>14</sup>」が、序文は王逸という前提（但し論文中では未検証）の上で、序と注の食い違いの理由を説明する。賈誼「惜誓」や東方朔「七諫」など、作者が屈原でないことがはっきりしている漢代の楚辭についても王逸が屈原の自述として注する<sup>15</sup>こと等を指摘し、浅野通有氏の先行研究<sup>16</sup>

を引きながら、『楚辭章句』の注釈行為は漢代經学を踏まえて考えるべきであって、その視点から見れば、『楚辭章句』は卷一の「離騷」を経とし、続く諸篇を「離騷」の經義を闡明するための伝とする意図のもとに編纂されたものであるとする。王逸の注は本文が持つ特定の時代性を捨象し、普遍化類型化を行なおうとしており、各篇の個別具体的な作者や制作状況を意図的に排除している。「九章」について、「離騷」前序で襄王の時に制作と明言しながら、注では懐王と屈原で説くのもこのためであり、「懐王と屈原」は「暗君と忠臣」の組合せとして類型化されているのであると言う。

次に、「離騷」「天問」篇の前後に序があることについては、小南一郎『楚辭とその注釈者たち』が2序の性質は異なるため<sup>17</sup>、同一人物によって書かれたはずはないとは断定できない、当初から一篇に二つの序があることも可能とする。

各篇の前序については、小南氏は先行する序に王逸の見解を加えたものと見る。王逸は辞賦本文に序や注を含めた楚辭文芸伝承の集大成者であり、王逸の楚辭解釈は王個人の創見ではなく、先行する楚辭文芸の伝承が王逸に受容され、序や注に結晶したものであるとする。具体的には、「離騷」「後序」に言う「所識」は楚文化における楚辭文芸の伝承を、「所知」は方言や民俗など楚文化に対する知識、「稽之舊章」の「舊章」は劉安、班固、賈逵などの先行した注釈を指すと想定する<sup>18</sup>。

尤も『章句』の序と注が戦国以来の継承に基づくことの指摘は多い。蔣論文も、序は王逸個人の創見ではなく、先行する「世相教傳」（「天問」後序）があるという観点から王逸作説を否定しており<sup>19</sup>、崔・石川論文も、王注には「世相教傳」された代々の師伝が沈殿しており、それが『章句』テキストについて多く指摘されるどころの、各篇の序と序の間、序と注の間に矛盾が多いという現象を生む要因であると説いている<sup>20</sup>。

また、「離騷」篇の前後に付される序について、前の序を「離騷」序、後ろの序を『楚辭章句』序とする説もある。前述した『楚辭學文庫』では定説としている<sup>21</sup>。これについて、小南氏は、現行本『楚辭章句』には各巻頭に「校書郎臣王逸上」の題辞がある版があることから、『楚辭章句』は校書郎として任官中に勅命を受けて編纂されたものとする見方に基づき、後序は『章句』を献上した際の上奏文ではないかと推測する<sup>22</sup>。

林前掲論文も「離騷」後序を『楚辭章句』序とする。根拠として、その内容が屈賦全篇および前漢劉安以来の楚辭学について述べていること、その形式が『章句』の旧本では序は篇の後ろにあったと考えられる<sup>23</sup>ことから、古代の巻軸式書籍の痕跡を留めたもので、現行本の後序は旧本では巻頭にあったのではとする。「離騷」前序については、後序と内容や風格が違う<sup>24</sup>ため後序とは別人が書いたはずであり、またその述べるところが注文とも食い違うため、王逸作ではないとする。これに対し、小南氏は「前序」の文体は注釈の文体と一致するとして、王逸の手になる可能性が高いと推論している<sup>25</sup>。

以上、『楚辭章句』各篇の序について提起されている問題を整理してみると、『章句』各篇の前

序は「世相教傳」された『楚辭』“原序”を王逸が整理・加筆したものとみている点で王逸作説とその否定説の見解は基本的に同じである。これらを踏まえた上で、本研究では、序については以下のように扱うこととする。まず、「離騷」「天問」前後の序文については、ひとまずそれぞれ「前序」「後序」と呼ぶ。「離騷」前後の2序について、「離騷」序『楚辭章句』序とすることには議論があるが、2序が現行本で各篇の前後にあることは確かであるからである。「離騷」「天問」後序については、明らかな根拠があり、王逸作とすることに異論は無い。前序についてはその作者について疑義の余地の無い史料は確かに無い。このため、本稿では王逸序ではなく、単に前序と呼称する。

## 二、各篇の注について

王逸が楚辭文芸の伝承を集大成したものが『楚辭章句』であるとするなら、注文中の楚辭文芸伝承と王逸自身の見解はどう区別するのか、或いはそれぞれの割合はどの程度なのか、という問いがある。これらは果たして注文は王逸注なのかと問うものだろう。

蔣前掲論文は、『章句』注の大部分は漢代の章句法一字義解説・大義・論拠・諸説の順で注を施す一からなっているが、一部の篇<sup>26</sup>には韻語による注釈が付けられており、これは漢代の他の伝注では珍しい形式であると指摘している。小南氏は、この蔣論文が言う「漢代章句法」形式を「散文式の注」、例外的とされている「韻語」形式を「韻文式の注」とし、「韻文注」を先行した伝承を踏襲したもの、「散文注」を新たにつけた自注とみる。そして、自注は王逸が重視した作品「離騷」「九歌」「天問」「惜誦」「涉江」「哀郢」「懷沙」「橘頌」「招魂」「大招」と、先行する注が無い作品「惜誓」「七諫」「哀時命」に付したとする。

また、現行本は王注の原形とは異なっている可能性も指摘されている。長い手写および版刻の繰り返しのうちに、注文の文字や字句に生じた異同や後世の注の混入などのためである。この問題については、主に崔富章・石川三佐男「西村時彦对楚辞学的贡献<sup>27</sup>」に拠ってみて行く。論文中で指摘されている問題は概ね以下の3種である。

### ①誤り：類似する字形や字音への誤りなど

例)「離騷」本文「豈其有他故兮莫好修之害也」の王注「言士民所以變直為曲者、以上不好用忠信之人、害其善志之故也」の「善志」を『文選』李善注本「離騷」該当部分王注は「善士」とするのは、『文選』の誤り。

### ②変形：注文の省略や表現の書き換えなど

例)「離騷」本文「紉秋蘭以為佩」の王注「所以象徳、故行清潔者佩芳、徳光明者佩玉、能解結者佩觿、能決疑者佩玦、故孔子無所不佩也」が『文選』各本の該当部分の王注には無い。これは『文選』が省略したため。

### ③後世の注の混入

例1) 王注の中の「某一作某」(異文を列記する部分)

<孫詒讓説> 洪興祖注の混入。王逸『章句』と合刻されたため混同。善本とされる明刻単注本にも混入<sup>28</sup>。

<庄允益説> 『楚辭釋文』(南唐・王勉<sup>29</sup>)や洪興祖『楚辭考異』など後世の文献からの混入。

<崔・石川見解> 『章句』は皇帝に上奏したものであって、簡潔を旨としたために引用文の出典も記していないほどであるのに、異文を列挙するはずはない。

例2) 王注の中の反切

<林維純説> 反切の成立は早くても後漢末とみられ、王逸当時に行なわれたとは考えられない<sup>30</sup>。

注文に関しては、主に以上の問題が指摘されている。本稿は既に何度か言及した「離騷」後序「今臣…作十六卷章句」から『楚辭章句』注文は王逸の手になるものであると考える。その上で、王逸の楚辭学が先行する楚辭学の集大成であるなら、『章句』注が先行する解釈を王逸が受容した上で取捨選択や王逸自身の見解を加えたものであることは当然であり、「集大成」とはそういうことであると考え。本稿では『章句』の注を「王注」と呼称するが、それはこのような意味においてである。

また、字句の異同や加筆などの問題については、作業のもととなる版本を明示することで対処したい。本稿は検索作業を『文淵閣四庫全書電子版』で行ったため、基本的には『文淵閣四庫全書』に依拠するが、一部の異同については、崔富章・李大明主編『楚辭集校集釋<sup>31</sup>』を参照し、その場合は明記する。次に、加筆が指摘される字音および異文は、以下に示すように、本研究の考察対象とならないため、本論における考察に影響を与えることはないと考え。

### 三、 卷十七「九思」について

「九思」については、主に二つの問題点が指摘される。まず、王逸が『楚辭章句』をまとめた時点でそれは『章句』に含まれていたのか、或いは後世に付け加えられたものなのかという点である。これは王逸自身が「離騷」後序で「今臣…作十六卷章句」と明言しているためである。この問題については、後人が増益したものと見る説がある他、16巻に「九思」を加えた形が取られたのであって、「九思」は『章句』全体の叙的性格を持つのではないか。自作の辞賦を巻末に添えるのは、楚辭学の伝統であり、劉向の「九歎」も同様にして、自らが撰した楚辭テキストの最後尾に加えられたものとする説がある<sup>32</sup>。

いま一つの問題は、序と注は誰の手になるのかということである。これは、「九思」が王逸自身の作であるところから当然出てくる疑問である。

序については、既に見たように、清の嚴可均撰『全上古三代秦漢三國六朝文』など、巻一から

十六までの前序と「離騷」「天問」後序を王逸序として扱うものも、「九思」序については除外している。崔富章総主編『楚辭學文庫』は、「九思」序については「佚名」と表記している。林維純「《楚辭章句》序文作者問題考辨」のように、「九思」序の一部に王逸の文が含まれるとみる説もあるが、「九思」序は『楚辭章句』原本にはなく、後に付されたものとする見方が主流のようである。

注についても、自作自注は不自然であること、「九思」前序に「未有解説、故聊訓誼焉」とあることから、『章句』原本にはなく、後に付されたものとする見方がある。洪興祖『楚辭補注』は、子の「延寿の徒」の手になるのではと推論している。

蔣氏は、「九思」注は文体が特に「不純」で、語意も他の16巻と異なるとして、後人の注ではないかと推論している<sup>33</sup>。「不純」の意味については明確に説明されていないが、文脈から、上述の『章句』注に見られる2種の注形式、「漢代章句法」形式あるいは「韻語」形式のいずれでもないの意かと思われる。小南氏も「九思」注だけ形態が異なると指摘している<sup>34</sup>。

本稿では、「九思」篇において「離騷」テーマがどういう傾向を見せるのかという関心から、「離騷」テーマ語彙の検索や該当例の選別は他の諸篇と同じように行ない、作表するが、『章句』注文における屈原イメージを考察するに当たっては、「九思」の出例は加えない。

#### 四、その他

他に『楚辭章句』テキストについては、「九辯」が「九章」の前にあった等、各篇の篇次についての指摘もある<sup>35</sup>。

#### むすびに

以上、テキストとしての王逸『楚辭章句』について指摘されている問題点と議論をまとめてみた。今後、主題の考察を進めていくに当たって本研究が取る立場を改めて述べると、現行本『楚辭章句』各篇の前に付されている序については、その作者について明示する史料は無いとする見解に従い、王逸序とは断定せず、「前序」と呼称する。「離騷」「天問」後の序文は、「後序」と呼ぶが、明らかな根拠があり、王逸作とすることに異論は無いという認識である。

注文に関しては、「離騷」後序「今臣…作十六卷章句」から王逸の手になるものであると考える。その上で、王逸の楚辭学は先行する楚辭学を集大成したものであり、『章句』の「王注」は先行する解釈の受容と取捨選択の上にあるものとする。

字句の異同や加筆などの問題については、作業のもととなる版本を明示することで対処する。加筆が指摘される字音および異文は、本研究での考察対象からは外れるため、本論での考察に影響を与えることはないとする。



最後に改めて本研究の性質を述べると、考察の対象はあくまで後世の、例えば『楚辭章句』の考察では、王逸によってまとめられた後漢時点での屈原イメージである。本研究は文化論の立場からのものであり、広い意味では屈原研究と言えるのではないかと考えるが、文学としての楚辭研究からは外れるだろう。楚辭研究で従来取り上げられてきた諸問題、例えば辭賦の個々の字句が本来どういう意味なのか、個々の辭賦の眞の作者は誰なのか、成立年代は何時なのか、或いは屈原は実在したのかどうか、これらの問題については、その時点においてどう考えられていたのかを前提とする。楚辭に付された注文をテキストとして読解し、楚辭研究では“牽強付会”として排されがちな注釈者の思い入れの強い叙述も本研究では注者の思想を載せる著述として重視する。繰り出される語彙を手がかりに注釈者の思い入れや“牽強付会”の方向、その動機の解読を試みる。經学の伝統においては、經文への注の形で自論が展開されて来た。所謂「述べて作らず」である。注文は注者の思想や価値観を読み解く好テキストなのである。

- 1 王逸『楚辭章句』に戦国の宋玉・景差ら、漢の賈誼・劉向らの賦を収めることが示すように、屈原の後にその辭に習って創作された賦を総称して「楚辭」と呼ぶ。このため、屈原による創作とみなされた賦は区別のために「屈賦」(或いは「屈原賦」)と呼ぶことがある。しかし、いずれの賦を「屈賦」と認めるかについては諸説ある。このため、小稿では王逸『楚辭章句』序文に拠って、屈原作と“みなされた”賦という意味で「屈賦」を使用する。
- 2 版本による字体・字句の異同や注文における既述部分の省略がもたらすデータのぶれなどの問題が考えられる。
- 3 王逸については、『後漢書』「文苑傳」に「元初中、擧上計吏爲校書郎。…著楚辭章句行於世」とあり、元初年間に校書郎の職にあったことが知られている。現行本『楚辭章句』には各巻頭に「校書郎臣王逸上」の題辭がある版があることから、『章句』は、校書郎の任にあった元初年間に撰したものと考えられている。
- 4 崔富章・石川三佐男「西村時彦対楚辭学的贡献—兼述中国人心目中的屈原形象—」(『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第25号、2003年、108頁)では、漢簡の残片があるとするが、それ以上の記述はなく未詳。また、隋の釋智騫『楚辭音』残巻、唐(佚名)『文選集注』120巻本の残巻(含楚辭)がある(崔富章総主編『楚辭學文庫』—『楚辭集校集釋』集校徵引文獻要目)。
- 5 具体的には、『楚辭章句』巻一から十六までの前序と「離騷」「天問」後序を王逸序として扱っている。巻十七「九思」序については、「佚名」とする。
- 6 『隋書』巻三十五「志」第三十「經籍」四
- 7 宋代以降とされるのは、例えば後述するように六臣注『文選』などでは状況が異なるからであろう。

- 8 蔣氏は、『後漢書』「文苑傳」王逸伝に「其賦、誄、書、論及雜文凡二十一篇。又作漢詩百二十三篇」とあり、また『隋書』「經籍志四」集部「後漢南郡太守『馬融集』」の下に付された注に、「梁有…王逸集二卷、録一卷」とあり、王逸にはこれらの著述があったことが知られるが、『王逸集』は亡失した。明の張溥が改めて『王叔師集』を編纂した際、『楚辭章句』各篇の序を集録したが、これらは『後漢書』が言う「其賦、誄、書、論及雜文凡二十一篇」に含まれていなかったはずであると指摘する。蔣天枢「《後漢書・王逸傳》考釋」『楚辭论文集』陝西人民出版社、1982年、205頁。清の嚴可均撰『全上古三代秦漢三國六朝文』も王逸の文として『楚辭章句』巻一から十六までの前序（巻十七「九思」序を除く）と「離騷」「天問」後序を収録している。
- 9 蔣天枢「論《楚辭章句》」『楚辭论文集』陝西人民出版社、1982年
- 10 他には、序が言う当該篇の趣旨が当該篇の注では反映されていない等を指摘する。
- 11 林氏は、「九思」序は、洪興祖『楚辭補注』現行本と『章句』旧刻本とで食い違う。『補注』「逸、南陽人、博雅多覽、讀楚辭而傷愍屈原、故爲之作解、又以」は『章句』旧刻本に無い。自序とは考えにくく、後人の評語か。一方「逸與屈原同土共國、悼傷之情、與凡有異、竊慕向・褒之風」は、『補注』『章句』共にあるが、特に「竊」という謙讓表現から自序と推論している。林維純「《楚辭章句》序文作者問題考辨」中国屈原学会編『楚辭研究』齊魯書社、1988年、449頁。なお、林論文は『補注』に収められた「九思」序部分として「逸…讀離騷而傷愍屈原」とするが、『楚辭集校集釋（上）』（『楚辭學文庫』一）に拠り「楚辭」に改めた。
- 12 『漢書』巻八十七「揚雄傳」にある「畔牢愁」の創作事情「又旁惜誦以下至懷沙一卷、名曰畔牢愁」を指す。
- 13 難点は、「九辯」序の「至於漢興、劉向・王褒之徒、咸悲其文、依而作詞、故號為楚詞。亦承其九以立義焉」の下りが、まるで劉向より後人の手になるようであることであるが、六臣注および李善注『文選』ともに「九辯」序にこの部分がないことから、この部分は後人の加筆と推論している。
- 14 宮野直也「王逸『楚辭章句』の注釋態度について」『日本中國學會報』第39集、1987年
- 15 「惜誓」注では「哀己年歲已老、氣力衰微…」等と言い、東方朔「七諫」注では「言懷王不察己忠謀…反信讒言終弃我於原野…」等、一人称で注する。但し、『章句』「惜誓」前序は「不知誰所作也、或曰賈誼、疑不能明也」としており、賈誼作と断定している訳ではない。
- 16 浅野通有「『楚辭章句』における九弁の編次—王逸によって意図された経伝的構想—」『國學院雜誌』第71巻第7号、1970年。
- 17 前序は「屈原伝説と結びつけて、作品の成立事情を説く」、後序は「自らの注釈の基本姿勢を先行する注釈との関係で述べる」とする。小南一郎『楚辭とその注釈者たち』朋友書店、2003年、324頁。
- 18 同上、332・339～341頁

- 19 蔣、前掲注 9 論文、226～227 頁
- 20 崔・石川、前掲注 4 論文、109 頁
- 21 潘嘯龍・毛慶主編『楚辭著作提要』（崔富章総主編『楚辭學文庫』第三卷、湖北教育出版社、2003 年）、3 頁
- 22 小南、前掲注 17 文献、332 頁
- 23 宋の黄伯思『東觀餘論』巻下の「校定楚詞序」に言う「某所見舊本…王逸諸序竝載于書末…駢列于巻尾、不冠于篇首也」を指すと思われる。
- 24 「離騷」について、後序は五経で説くのに、前序は「比」「興」で説く等の点を指摘。林、前掲注 11 論文、435 頁
- 25 詳しくは、小南、前掲注 17 文献、324～326 頁
- 26 「九辯」「抽思」「思美人」「惜往日」「遠遊」「卜居」「漁父」「招隠士」「九懐」の 9 篇。蔣、前掲注 9 論文、216 頁。
- 27 崔・石川、前掲注 4 論文。
- 28 孫詒讓『札迻』光緒二十年刊本、巻十二（崔・石川、前掲注 4 論文に拠る）。
- 29 引用論文では『楚辭釋文』とするだけであるが、前掲注 17 文献、20 頁に拠り撰者を補う。
- 30 林、前掲注 11 論文、448 頁
- 31 藩・毛、前掲注 21 文献、第一巻
- 32 小南、前掲注 17 文献、22 頁
- 33 蔣、前掲注 9 論文、217 頁
- 34 小南、前掲注 17 文献、317 頁
- 35 主な論考として、浅野、前掲注 16 論文など